

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』 における母性と母娘関係をめぐって

榊 原 理枝子

1. ヴァージニア・ウルフのフェミニズム

『三ギニー』(1938)において、ヴァージニア・ウルフは、「フェミニスト」という言葉が、もはや「死語」であると言い切っているが(227)、まず、ウルフにとっての「フェミニズム」の意味するところを明確にしておくことが必要であろう。このフェミニズム的エッセイ『三ギニー』が執筆、出版された1938年の時点では、女性参政権はすでに獲得されており、また、女性が収入を得る手段の幅も多少は広がり、第一波フェミニズムは、その目標を、一応は達成していた。こうした状況において、ウルフら「フェミニスト」たちのターゲットは、女性の権利の獲得、擁護のみにとどまっていなかった。単に女性の権利の獲得だけでなく、すべての人々に正義・平等・自由をもたらすという、より遠大な目標を掲げた19世紀イギリスのフェミニスト、ジョセフィン・バトラー(Josephine Butler, 1828-1906)の言葉を引用し、ウルフはバトラーの姿勢に同感を示している(*Three Guineas* 227)。そして、ウルフは、かつてのフェミニストたちが、「家父長制国家の横暴と闘ってきたように、」今度は、「ファシスト国家の横暴と闘う」と宣言するのであった(*Three Guineas* 227-28)。

ウルフは、ファシズムだけではなく、植民地支配や戦争をも、男性支配の歪みのあらわれと考えていた。女性を劣ったものであると位置付けることが、家父長制社会における男性支配に根拠を与えているということを、ウルフは、『自分だけの部屋』(1929)で指摘している(32)。女性は「男性の姿を實際

の二倍に映し出す快い魔力を持った鏡 (32)」として機能してきたと、ウルフは述べ、この魔力がなかったのであれば、「すべての戦争の功績は生み出されなかったでしょう (32)」と述べている。さらに、「鏡」は、「あらゆる荒々しい英雄的行為」に不可欠であるとウルフは続け、「だからこそ、ナポレオンもムッソリーニも、女性の劣等性をあれほどにまで強調したのです」と、ファシズムが男性至上主義のイデオロギーであると考えられていたことに言及している (32)。そのうえ、ウルフは、仮に、男性が、この「鏡」に映った「実物の少なくとも二倍の大きさの自分の姿」を見ることがなければ、「原住民を教化」するようなことはできないであろう、とも述べている (33)。「野蛮=非西洋」を「文明化」するのが、「文明=西洋」の責務であるという、植民地支配を正当化するためのイギリス帝国主義における言説を想起すると、ウルフがここで、帝国主義における文明／野蛮という二項対立が、男性／女性というそれと、密接に絡み合っているということを、暗示しているのはあきらかである。女性を、男性に対して従属的な地位に固定化することによって、男性の優位を主張するという思想こそが、戦争、ファシズム、植民地支配の根底にあるとウルフは考えているのである。換言すれば、「男性／女性」という二項対立が「文明／野蛮」、「西洋／非西洋」という二項対立と相似形をなしているとウルフは見ているのである。そして、「文明／野蛮」、「西洋／非西洋」という二項対立を人々が支持する理論的下地を作っていたのが、「男性／女性」という二項対立であったというのが、ウルフの考えであった。

つまり、ウルフの「フェミニズム」とは、権力の横暴、支配への抵抗、反戦を意味していたのである。『三ギニー』に見られる、「フェミニズム」という言葉は死語となったというウルフの宣言は、職業に就く自由を勝ち取り、収入を得る手段を獲得することを目指すといった、従来型の「フェミニズム」から前進したところに、彼女たちの「フェミニズム」があるという意味だと解釈すべきである。つまり、ウルフが、「男性／女性」という二項対立を攻撃したのは、その対立に、男性による女性の支配という力関係が存在したからであったのだ。

ここで、ウルフ批評の流れをかいつまんで見てみよう。審美的モダニストとしてウルフを解釈しようとする流れが、1890年代以前のウルフ批評の大

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』における母性と母娘関係をめぐって

勢を占めていた。が、1980年代以降に盛んになってきたフェミニズム批評によって、「意識の流れ」に代表されるウルフの小説技法の斬新さよりもむしろ、男性優位のヒエラルキーの転覆を目論むフェミニストとしての彼女の側面こそが革新的であるとする論が多く見られるようになる。また、ポストコロニアル批評の観点から、反帝国主義者としてのウルフに焦点を当てた論も、近年増えてきている。

フロイト精神分析のエディプス化された家族という枠組みで、ジェンダーの問題を中心に据えて、すなわち、「母親中心の物語／父親中心の物語」という二項対立によって、エリザベス・エイベルは『ダロウェイ夫人』を論じる。エイベルの二項対立は、フェミニストとしてのウルフの姿勢が、『ダロウェイ夫人』でどのように展開されているのかを考える際に、大きな手助けを与えてくれる。ロンドンから遠く離れた田園ブアトンで過ごした物語上の「現在」から約30年前の「娘時代」のクラリッサと、保守党に属する下院議員リチャード・ダロウェイの妻としてロンドンで過ごしている物語上の「現在」の彼女の、女性としての進展を、エイベルは、「過去／現在」、「自然／文明」、「女性的／男性的」という対立項から論じている。そして、これらの対立項がなす分断は、『自分だけの部屋』に見られることになる「女性の価値観は、男性によって作られてきた価値観とは、往々にして異なっている(67)」というウルフの主張へとつながっていると、エイベルはいう⁽¹⁾。

エイベルによれば、クラリッサの「娘時代」から「現在」への進展は、「女性中心の自然な世界」から、「異性愛的かつ男性中心の社会的な世界」への移行である⁽²⁾。だが、「娘時代」と「現在」の間にクラリッサの身に起こったはずの、結婚、出産などに関する言及が見られないことを、エイベルは指摘しているのみである。我々は、エイベルが追求しなかった点、ことに、クラリッサが回想する彼女の過去には、母性にまつわるものがほとんど現れないということに、注目したい。つまり、「現在」のクラリッサが、彼女の「過去」を想起する際に、その言及の範囲を「娘時代」ととどめ、母としての経験を除外したということの意味を考えたいということである。

2. テクストを取り巻いていた社会的・文化的背景とウルフのフェミニズム

ところで、終戦後のイギリスを覆っていた空気を映し出している⁽³⁾『ダロウェイ夫人』のテキストを論ずるにあたり、第一次世界大戦後のイギリスの社会的、文化的背景を、エイベルの二項対立、なかでも、我々がウルフの「フェミニズム」を考える際に重要である「女性中心／男性中心」という対立項とリンクするかたちで、概観する必要がある。

ヴィクトリア朝からエドワード朝にかけての中産階級のあいだで尊ばれていたのは、「大英帝国」を支配していた「男性的」な公的領域の重視であり、帝国拡張主義であった。が、大戦終結後のイギリスは、一転、私的領域に重点を置き、より国内に目を向けるといった、大戦前の基準に照らせば、「女性的（“feminine”）」な「英国性（Englishness）」の形成へと移行したと、アリソン・ライトは見る⁽⁴⁾。この言葉を引用して、ジョン・テイラーは、第一次世界大戦のプロパガンダで培われた「英国性」よりも、確かなものを待望する中産階級の期待にこたえるべく、第一次世界大戦後から第二次世界大戦前までの「英国性」が再形成されたと見ている。リンデン・ピーチは、この新しい「英国性」が、ライトの呼ぶところの「保守的モダニズム」、テイラーのいうところの「保守的ナショナリズム」を引き起こしたと述べている（97）。つまり、大戦後のイギリス社会で、保守主義が支持されたということである。が、本論との関わりでは、大戦前、大戦後の支配的コードの二項対立に注目することで、テキストにあらわれたウルフのスタンスを解読したい。

ピーチは、私的領域が特権的コードを形成する「フェミニン・イングランド（“feminine” England）」という「英国性」のイメージが、ウルフの小説に入り込んでいるという（97）。ピーチの概念を借りれば、この「フェミニン・イングランド」という「英国性」に対置されるのが、ウルフが批判的であった「男性的」な価値意識が支配していた戦前のイギリス社会のコード、すなわち「マスキュリン・イングランド」であろう。

『ダロウェイ夫人』のセプティマスは、第一次世界大戦の兵士であった。大戦後、彼は、「遅れて出てきたシェル・ショック（162）」を患い、ついには

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』における母性と母娘関係をめぐって

自殺する。このプロット展開を、ピーチが、ライトやテイラーを引用しつつ用いている「フェミニン／マスキュリン・イングランド」という概念を用いて解釈してみよう。

セプティマスは、そもそも「祖国を守るため」という「男性的」な動機、すなわち、「マスキュリン・イングランド」の大義、換言すれば、帝国主義と表裏一体をなすコードに突き動かされて志願したのだった。こうして支配的権力に従って軍人生活に入った彼は、軍隊において上官との親密な友情を育む。が、この友情は、「男性的」支配、すなわち父権社会が排除すべき同性愛の色合いが濃厚なものであった。が、テキストが表明する「マスキュリン・イングランド」へのアイロニーはこれでは終わらない。彼は、その上官の戦死によって、精神を病むようになる。彼自身は「感じる力がない (he could not feel) (76)」というかたちでこの不調を意識し始めた。テキストが、労働者階級出身のセプティマスによって、「イギリスを第一次世界大戦に突入させた」と、ウルフが考えているところの、ヴィクトリア朝の文化と教育制度が共謀して作りあげた、一種の無感覚な (unfeeling) 上流階級の男性性 (Peach 19-20) へのアイロニーを表明していると解釈できる。

さらには、セプティマスを治療していた町医者 of ホームズ医師と、最後にセプティマスが診察を受けに行った精神医学界の権威サー・ウィリアム・ブラッドショーの両者⁽⁵⁾に、ウルフは「獣」という表現を与えている⁽⁶⁾。「男性的」な価値意識を体現している彼ら医師たちに追いつめられて、セプティマスは死を選ぶ。この展開によって、ウルフは「フェミニン・イングランド」を支持する立場から、「マスキュリン・イングランド」を痛烈に批判していると解釈できる。つまり、このラインにそって読解すると、ウルフは、「フェミニン・イングランド」という「英国性」が、大戦後のイギリス社会に取り入れられたところで、戦前の「マスキュリン・イングランド」は、依然として力を振るい、セプティマスのような弱者を弾圧していると、見ているということになる。

ピーチのいうように、ウルフが主張しているのは、大戦後のイギリス社会で支持されてきた保守主義が、「フェミニン・イングランド」の価値意識にのっとっているといいながら、根底では、戦前の「マスキュリン・イングランド」と結託しているということである。その一方で、しかしながら、テク

ストを検討することによって、我々は、ウルフの「マスキュリン・イングラ
ンド」との無意識の共謀に、気づくであろう。

こうしたテキストを取り巻いている社会的・文化的土壌を視野に入れたう
えで、先に述べたフェミニズムに対抗する様々なイデオロギーのなかでも、
とりわけ家父長制と帝国主義に対して、ウルフがフェミニストとしていかな
る身振りを示しているのかを、『ダロウェイ夫人』における母性と母娘関係
に注目することで、解明しようというのが、本論の目論みである。

3. 『ダロウェイ夫人』における「母性」

まずは、物語上の「現在」において、17歳のエリザベスの母であるクラ
リッサの「母性」を見ておこう。エイベルによれば、クラリッサは結婚によっ
て「牧歌的な女性の世界」であるブアトンから引き離され、「社会的・政治
的世界」のロンドンに移り住んだ。彼女にとって、「ロンドンの生活は、女
性との親密なつながりが欠如」したものであると、エイベルは見ている⁷⁾。
この「欠如」の例を、エイベルはいくつか挙げているが、そのなかで我々が
注目したいのは、クラリッサと彼女の一人娘エリザベスの関係である。クラ
リッサは、エリザベスの心をつかむことができない。エリザベスは、彼女の
家庭教師で、冴えない中年女性のミス・キルマンに心酔し、彼女の思想に耳
を傾ける。そのことをクラリッサは気に病んでいるのである。エリザベスが、
ミス・キルマンを尊敬できなくなってから、彼女が敬愛の念を捧げるのは、
父リチャードであって、母ではない。また、クラリッサは、再会したかつて
の恋人ピーターに、「私のエリザベス (41)」と娘を紹介する。彼は、その様
子に虚偽を感じずにいられないし (42; 48)、エリザベスがクラリッサとは
うまいっていいないと感じ取っている (48)。これらが示しているのは、
クラリッサが幸福な母として表象されていないということである。

次に、クラリッサの回想のなかの彼女自身の母に関する描写を探してみよ
う。すると、クラリッサの母が死んだのは、彼女の幼い頃だったらしく、ク
ラリッサの少女時代の回想のなかに、彼女の母にまつわる記述がほとんど見
られないことに気づく。物語上の「現在」において、「湖」という言葉を、
クラリッサ自身が口にしたことから、彼女は、彼女自身が、「両親に挟まれ

てアヒルにパンくずを投げる子ども(36)」であったことを思い起こす。この彼女の内的独白によって、「現在」の彼女が、彼女の母親の記憶を多少は持っているであろうと、我々が推測することができるくらいである。

また、我々が注目したいのは、クラリッサの母に関するエピソードには、死のイメージがつきまとっていることである。物語上の「現在」の一日の夕べ、クラリッサは、自宅で盛大なパーティを開く。が、その喧噪の最中にも、絶えず彼女を悩ませている「私たちは確実に死ななくてはならない」という問題を、彼女は思い出してしまう。そのとき、招待客の女性に、「今夜のあなたは、私が初めてお会いしたときの、グレーの帽子をかぶってお庭を歩いてらしたお母様にそっくりでいらっしゃる」と言われ、彼女は「お庭を歩くお母様」を思い出して、涙を流す(155-56)。エイベルによれば、クラリッサと彼女の母との関係を示す肝心な物語は、「語りから除外されている」のであり⁽⁸⁾、『ダロウェイ夫人』におけるクラリッサの少女期の物語は、死んだ母、妹の事故死といった、女性との関係の喪失を示すモチーフで彩られているという⁽⁹⁾。

クラリッサ自身に、母性的な母、生きた母の記憶がほとんどない。このことはクラリッサが「母性」と切り離された存在として表象されていることを示しているのである。

4. 「母性的な」サリー／「母性的でない」クラリッサ

クラリッサの「娘時代」において、ある晩突然ブアトンの彼女の家に、彼女と同年代の少女サリーがやって来て、そのまましばらく居着いてしまった。このサリーが、クラリッサにとって、死んだ彼女の母の代わりの役割⁽¹⁰⁾を果たしたと、エイベルは分析している⁽¹¹⁾。物語上の「現在」のクラリッサは、当時のサリーとの友情を、「あれは、結局、恋だったのではないだろうか？(27)」と回想しているが、ここで問題にしたいのは、クラリッサの同性愛的感情の対象としてのサリーの役割ではなく、サリーがクラリッサにとって、比喩的な意味での「母」であったという点である。サリーは、クラリッサに、モリス⁽¹²⁾、シェリー、プラトンの作品を読ませ、彼女の知性を養育したのであった。また、急進的な政治思想を持っていたサリーの影響で、クラリッサ

は伝統的な価値意識に反発を感じ、反体制的な思想を抱くようになる。物語上の「現在」の彼女が、保守党議員の妻であり、総理大臣をパーティに招いて得意になり、イギリス王室に敬意を払っているのとは対照的である。

だが、我々は、サリーとクラリッサの比喩的な意味での母娘関係を検討することをここでの目的としているのではない。物語上の「現在」において、クラリッサのパーティで彼女と再会するサリーの役割を、エイベルは重要視していないが、物語上の「現在」のサリーの豊穡性、母性に目を向けるとき、彼女の重要な役割が見えてくるのである。

ピーターは、パーティでサリーと再会する。かつて親しい友人同士であった二人は語り合い、サリーの話を聞きながら、ピーターは次のように感じる。

そしてまだまだある一植物、アジサイ、バイカウツギ、スエズ運河より北では絶対育たないととても珍しいハイビスカス・リリー、でも私 [=サリー] は、マンチェスター近郊で、庭師を一人雇ってその花を歌壇で育てているのよ、花壇がいくつもよ！クラリッサは、そうしたすべてからうまく逃げたんだ、母性的ではないから、彼女は。(168-69) (下線筆者)

サリーとは対照的に、クラリッサは「母性的ではない」と、ピーターは思っている⁽¹³⁾。ここで、クラリッサの「娘時代」に、ブアトンで彼女と同居していた厳格な未婚の叔母、ヘレナの趣味が押し花であったということを想起したい。エイベルによれば、押し花は女性に課せられていた文化的な圧力を示唆しているということだ⁽¹⁴⁾。それならば、サリーが花壇で花を育てているということが示しているのは、彼女の豊穡性であると言えよう。

また、サリーは、ピーターに、彼女が五人もの息子たちの母であると告げる。すると、ピーターは、「母性の柔らかさ (softness) (165)」を感じる。この箇所は、ウルフが次に発表する小説、『燈台へ』(1927) のラムゼイ夫人が、八人もの子どもたちの母であり、母としての慈愛に満ちた女性として形象されていることを想起させる。「娘時代」のクラリッサの比喩的な意味での「母」であったサリーは、物語上の「現在」においては、母性に溢れた母となっているのである。

対照的に、クラリッサは、「母性的でない (unmaternal)」とされ、さら

には、ラムゼイ夫人が感じているような母としての喜びを語る場面も与えられていない。サリーやラムゼイ夫人が多くの子どもたちの母であるのに対し、クラリッサにはエリザベスしかないことも、彼女の母性の稀薄さを象徴している。

さらに、ピーターがサリーに「柔らかさ」を感じている一方で、彼はクラリッサを「氷柱のように冷たい (70)」と言っている。クラリッサ自身も、彼女に欠けているのは、「表面を破って、男女のあるいは女同士の冷たい接触に、波紋を与えてくれる何か温かいもの (26)」であることを知っているというかたちで、この「冷たさ」を自覚している。彼女の「氷柱」に喩えられる「冷たさ」は、サリーの母としての「柔らかさ」と対置されることによって際だち、また、サリーの「母性」によって、クラリッサの「母性的ではない」ということが、強調されるのである。物語上の「現在」におけるサリーの重要性は、ここにある。

さらに、クラリッサの「母性的でない」母としての側面に注目することによって、エイベルの二項対立では言い尽くせないものが出てくることがあきらかになる。エイベルによれば、クラリッサの「現在」は、「異性愛的かつ男性中心の社会的な世界」であるのだが、クラリッサが「母性的」な母になっていないことによって、テキストが示している、そしてエイベルも指摘している、「過去」と「現在」の「同性愛的／異性愛的」という二項対立が崩れてくるのである。

ここで、テキストを取り巻いていた母性に関する言説を見ておきたい。1875年以降、イギリスでは出生率が下落していた。また、乳幼児死亡率も高く、これらを、イギリスの国際的競争力の低下、都市における貧困層の増大と結びつけ、大英帝国の失墜を唱える言説が横行していた。そして、ボーア戦争 (1899-1902) への出兵を志願した青年たちの約 60 パーセントが、身体的欠陥のために兵士として不適格とされたというニュースは、イギリス人の「質的低下」のあらわれとして、当時の多くのイギリス人を不安に陥れた。また、第一次世界大戦下では、次世代の兵士の母としての女性の役割を重視する言説が蔓延していた (Grayzel 122)。こうした状況において、「多産な母」、すなわち出産、育児といった「母としての役割」から逸脱しない母は、当時のイギリスを思想面から支えていた家父長制の要求にこたえただけでは

なく、国力を増強することによって大英帝国の繁栄をも支えていた。さらには、ダーウィニズムの影響下における、産み育てることを「女性の本性」とする思想⁽¹⁵⁾にも合致していた。

こうした状況において、権力サイドによる母性の過剰な賞揚に、家父長制と帝国主義との共謀関係をウルフが察知したであろうということを、これから『ダロウェイ夫人』のテキストに見ていきたい。物語上の「現在」のサリーが、多産で母性的な母、しかも五人の息子の母であるとされていることは、彼女が、後期ヴィクトリア朝から第一次世界大戦下、終戦後にかけてのイギリス家父長制と帝国主義に貢献する女性として表象されていることを示す。このように見る場合、「母性的ではな」く、娘が一人いるだけのクラリッサは、家父長制における女性の役割に回収されることを拒み、帝国主義に共謀することを拒否する女性としてテキストに存在していると言えないだろうか。換言すれば、「母性的ではない」母としてのクラリッサは、エイベルのいう「異性愛的かつ男性中心」のジェンダー観の要求する女性ではない。ヒロインをこのような女性とすることによって、ウルフは、帝国拡張という目的のために母性を過剰に賞揚するイデオロギーに抵抗を示しているのである。

5. 「母性的ではない」母の成功

ミス・キルマンと外出したエリザベスは、外出先でミス・キルマンへの心酔から冷め、彼女と別れて、クラリッサがパーティの準備をしている自宅に戻ることにする。エリザベスがミス・キルマンに幻滅する場面については、後ほど論じる。当面は、エリザベスがクラリッサのもとに帰る決意をするということに注目したい。エリザベスは母の望むとおり、パーティに出ることにするのである。が、このことが、直接的に、クラリッサの母としての勝利を意味するのであろうか。ミス・キルマンとの別れを決意してから、家に戻るまでのエリザベスの足取りを辿ることによって、「母性的でない」母クラリッサを、テキストがいかに評価しているのかという問題を考えたい。だが、ここでは、クラリッサ、ミス・キルマン、エリザベスの間の緊張関係が主な関心事ではない⁽¹⁶⁾。パーティでの彼女については、後で述べるが、まず、家に向かうエリザベスが、まっすぐ帰宅するわけではないことに注目したいの

である。つまり、直接家に帰らないという彼女の行動は、母の望むとおりの娘となることに対する彼女の密かな抵抗を暗示しているのである。

エリザベスは、あてもなくバスに乗り、ダロウェイ家の人々は普段誰も行かないというストランド街まで行く(121)。この行動が示しているのは、彼女が「パイオニア、冒険心に満ちた、疑うことを知らない迷い人(121)」であるということだ。こうして一人でストランドを下っていくことで、エリザベスは、かつてダロウェイ家の女性たちが辿らなかったような人生を生きるという可能性を夢見る。そのときの彼女の足跡を検討してみよう。

彼女はフリート・ストリートに目をやった。そしてセント・ポール大聖堂に向かって少し歩いた。夜中にろうそくをとめて、見知らぬ家をさぐりに行った人が、急に寝室のドアをさっと開いて出てきたその家の主人に、何の用だと言われるのではないかと恐れながらつま先立ちになって奥へ踏み込んでいくように、彼女はおずおずと歩いて行った。そしてその見知らぬ家の寝室か居間か食料貯蔵室にまっすぐ通じているかもしれないドアが開いていても、そこに入って行きはしないのと同じで、彼女は怪しげな小径や魅惑的な横町に踏み込んだりはしなかった。なぜならば、ダロウェイ家の人々は普段ストランドに行かないから。エリザベスはパイオニア。冒険心に満ちた、疑うことを知らない迷い人。(121)

エリザベスにとっての「ストランド」とは、既存のジェンダー観からはみでるような女性の行き方をメタファーとして示す記号である。ならば、彼女が、ダロウェイ家の人々は通常足を踏み入れない場所「ストランド」を彷徨する「パイオニア」の生き方をするのかと思えば、エリザベスは「パイオニア」としてストランドまで足をのばしはしたものの、怪しげな小径や魅惑的な横町には、踏み込まなかった。このエリザベスの足取りが象徴的に示しているように、「パイオニア」として、彼女は新しい生き方を目指しながらも、怪しげな小径に入り込むような危険なまねはしない。つまり、彼女が描く夢にもかかわらず、彼女が、ヴィクトリア朝以来のジェンダー観において価値を置かれてきた女性のあり方である「家庭の天使」⁽¹⁷⁾や、「完璧な女主人」⁽¹⁸⁾に、いずれは回収されてしまうのではないかという可能性を暗示しているの

である。実際、エリザベスは一人歩きに夢中になりすぎたりはしない。ストランドの珍しい光景に目を奪われながらも、彼女はパーティのための着替えをしなくてはならないことを覚えていて、時間を気にしている(121)。ついに、彼女は、時間も遅いし、母は彼女が一人でうろつくの嫌うであろうと考え、ストランドをあとにする(122)。

エリザベスを「解読不可能」と言いながらも、エイベルは、エリザベスがいずれは職業を持つというかたちで社会参加をするであろうと見ているのに対し⁽¹⁹⁾、レイチェル・ボウルビィは、エリザベスが職業に就きたいと考えているのは、母への反抗にすぎないと見ている(83)。確かに、エリザベスが夢見ている将来の希望の実現は疑わしい。エリザベスでさえ、「どちらかといえば怠け者(121)」の彼女自身の夢を「馬鹿みたい(121)」と考えている始末である。エリザベスは「医師」か「農場主」になりたいと考えているのだが、それらは、彼女のような中流階級の家庭の娘が就く職業としてふさわしいとは考えられていなかった⁽²⁰⁾。つまり、彼女は、「医師」か「農場主」になりたいと空想することによって、伝統的なジェンダー観の求めるような女性となることに、また母の思い通りの娘となることに、密かに反発したのである。大戦後の社会が女性にもたらした自由にもかかわらず、テキストはエリザベスを家父長制の制度のなかに取り込もうとしているようである。

エリザベスが、母の意図に逆らわないように帰宅し、やはり母の望みどおりにパーティに出ているということは、クラリッサが母として成功しているということを示唆している。「母性的ではない」母クラリッサの、母としての成功で、ウルフは、母性を過剰に評価する家父長制のイデオロギーの虚偽を暴いているのである。

6. 母性賞揚のイデオロギーの共有

しかしながら、ウルフは「フェミニン・イングランド」を支持する一方で、無意識のうちに、「マスキュリン・イングランド」と軌を一にするイデオロギーをも共有している。パーティでのエリザベスをめぐる描写をたどることによって、これをあきらかにしていきたい。

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』における母性と母娘関係をめぐって

パーティで、エリザベスの美しさは人々の注目を集め、ある男性は、彼女を「ポプラの木」、「川」、「ヒアシンズ」にたとえ、その美を賞賛する。が、エリザベスは、彼女の犬のことが気になって、その男性には全く関心を向けない(167)。女性を「ポプラの木」、「川」、「ヒアシンズ」に喩えるような賞賛は、エリザベスが将来を夢見つつ街を彷徨いながら、「ひどく馬鹿げている(121)」と考えていたものであった。この場面は、彼女が男性の賞賛よりも犬、つまり彼女自身の関心事に価値を置いていることを示している。

社交界に出てはいるものの、エリザベスはジェンダーを意識していない。クラリッサは、娘が、家父長制社会で求められるような女性に成長していないこと、すなわち、ファッションや社交に関心がなく(8)、人々の、特に男性の目に、自分がどのように映っているのかということに興味を抱いていないことを心配している(119)。つまり、エリザベスの心がクラリッサから離れているというだけでなく、エリザベスは、クラリッサの望むような娘にはなっていないのであり、この点で、クラリッサは母として成功しているとはいえない。「母性的ではない」クラリッサの母としての不成功は、ウルフが当時の母性賞揚のイデオロギーを、はからずも共有してしまっているということを露呈している。

7. ウルフの反帝国主義

最後に、ウルフの反帝国主義を、クラリッサとエリザベスの関係から見ることにする。近年盛んになってきたポストコロニアル批評の立場によるウルフ論において、キャシー・J・フィリップスは、植民地と女性、ことに未婚の娘を結びつける19世紀の帝国主義的アナロジーの存在を指摘している。すなわち、当時、自活できないとみなされていた未婚の娘と同様に、植民地の人々に自治は不可能⁽²¹⁾だという論法⁽²²⁾であり、このアナロジーは帝国主義的植民地支配を正当化する方便の一つに使われていた(97)。

『ダロウェイ夫人』のピーターは、クラリッサとの恋に破れた後、インドに渡り、そこで行政に携わっていたが、物語上の「現在」、彼はインドから帰国し、まずクラリッサに会おうと、ダロウェイ家を訪問する。クラリッサとの再会を果たしてダロウェイ家を辞した帰り、通りで見かけた見知らぬ女

性⁽²³⁾をこっそり追いかけて、彼女との駆け引きを空想する(45-47)。その勇気を奮い立たせるのに、ピーターはインドでの行政官の地位を思い出していると、フィリップスは指摘している(244)。女性を手に入れるのと、植民地を支配することがパラレルになっているという点で、女性と植民地を同一視する帝国主義的アナロジーが使われていると、フィリップスは言っているのだ(16)。このフィリップスの議論を敷衍して、テキストが表明しているウルフの反帝国主義を読み解いてみたいと思う。

ピーターは、インドで行政官をしていた頃、「任地で特殊な鋏を発明し、イギリスから手押し車を何台も取り寄せたことがあった。けれど苦力たちは、あれらを絶対使おうとしなかった」(42)。ポストコロニアル批評の観点から、『ダロウェイ夫人』のテキストに向かうとき、ピーターが、インドでの彼の活動を回想する際に言及しているに過ぎないインドの苦力たちの存在が、重要性を帯びてくるのである。

ここで、エリザベスとの関係におけるクラリッサの立場、イギリス国家に対する彼女の姿勢を、もう一度確認しておかなくてはなるまい。ヴィクトリア朝以来の伝統的な女性の場所から抜け出ようとするエリザベスに対し、彼女を家父長制社会のジェンダー観に合致する女性にしたいと願うクラリッサ。つまり、「母性的でない」母として、反帝国主義的、反家父長制的なクラリッサであったが、娘との関係においては、家父長制支持の立場に立っているのである。

また、既に述べたように、「現在」のクラリッサが、総理大臣や王室に敬意を抱く体制支持派であるというだけではなく、物語上の「現在」として設定されている1923年6月の時点での総理大臣が、保守党のボールドウィンであったことをも想起しなくてはならない。当時、国内に深刻な失業問題を抱えていたために、ボールドウィンは植民地への移民を提案した⁽²⁴⁾。パーティの女主人として、総理大臣に誇らしげに付き添っているクラリッサ(154)の姿が象徴的に示しているのは、彼女が無意識のうちに帝国主義を支持しているということである。

一方、エリザベスは、いつも自分の苦悩ばかり話すというミス・キルマンに辟易し、彼女への敬慕の情を失ってしまう(120)。だが、エリザベスは、ミス・キルマンによって、イギリスの正当性を絶対視しない立場の存在も知

らされていたのであった (115)。

また、家父長制に対するエリザベスのスタンスを考えてみると、当時の家父長制社会における女性の場所から抜け出ようとする彼女の決意が、果たして実行に移されるのかどうか疑わしいという兆しが十分に示されながらも、テキストは断定を避けていた。だが、パーティの場面での彼女をめぐる描写を辿ることによって、彼女がクラリッサの望む通りパーティに姿を見せているながらも、クラリッサの望んでいるような娘にはなっていないことが分かった。

イギリス国家と帝国主義を思想面で支持する母と、その母に完全には従わない娘—この母娘関係は、インドの行政官であったピーターと、彼の発明した鋏や、イギリスから取り寄せた手押し車をどうしても使わなかったという苦力たちとの関係と、パラレルをなしている。だが、ここで言いたいのは、エリザベスが植民地民のメタファーであるという単純な反映論ではない。何気なく書き込まれている苦力^{クーリー}たちのエピソードは、西洋文化に同化することを拒む植民地民、周辺へと排除された存在の痕跡なのである⁽²⁵⁾。この意味で、未熟な娘の幼稚な夢として、その声に価値を置かれることのないエリザベスという、やはり周辺化された存在と重なるのであり、これらに目を向けることによって、ウルフの帝国主義に対する、そして、家父長制に対する抵抗を読み取ることが可能なのである。また、同様に、はじめに言及したセプティマス^{クーリー}の存在に対しても、支配的な制度によって沈黙させられた声の復権を目指しているという解釈が成り立つのである。

また、母にはまったく似ていないという (69; 167) だけではなく、金髪碧眼のダロウェイ家の伝統とも相容れない黒髪、中国人的な眼⁽²⁶⁾を持ち、東洋的神秘 (108) をたたえるというエリザベスの風貌は、彼女が、西洋文化支配の転覆の契機としてテキストに存在しているということを暗喩的に示しているのではないだろうか。

《注》

- (1) "Narrative Structure(s) and Female Development: The Case of Mrs. Dalloway" 108.
- (2) *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis* 31.
- (3) 大戦についてのウルフの意識と彼女の著作に関しては、Levenback を参照

されたい。

- (4) Alison Light, *Forever England: Femininity, Literature and Conservatism between the Wars* (London and New York: Routledge, 1991), 8. qtd. in Peach 97.
- (5) 無知な町医者 of ホームズ医師とは違い、精神医学の権威であるサー・ウィリアム・ブラッドショーの表象には、国家権力の手先としての性質が濃厚にあらわれている。バン・ワングは、フーコーの理論を援用して、国家権力の支配という観点から、サー・ウィリアム・ブラッドショーとセプティマス of 関係性を論じている (186)。
- (6) 国家権力、帝国主義、優生学の見地からのセプティマスに関する論考、また「獣」と表象される医師たちに関する議論については、拙論『『ダロウェイ夫人』における帝国主義のイデオロギー』を参照されたい。
- (7) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 31.
- (8) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 34.
- (9) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 31: "Narrative Structure (s) and Female Development: The Case of Mrs. Dalloway" 109.
- (10) さらにエイベルは、Sally という名前が、少女の頃に死んだというクラリッサの妹、Sylvia と響きあっていることにも言及し、サリーがクラリッサにとって、母の代わりであっただけでなく、妹の代わりでもあったと述べている (*Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 31; "Narrative Structure (s) and Female Development: The Case of Mrs. Dalloway" 109)。
- (11) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 31: "Narrative Structure (s) and Female Development: The Case of Mrs. Dalloway" 109.
- (12) モリスが社会主義者連盟 (Socialist League) を組織したのが、1884 年であった。また、物語上の「現在」から約 30 年前、つまり 1890 年頃、サリーが自転車に乗っていたということは、彼女が当時の「新しい女」たちの一人であったことを示唆している。自転車は、「新しい女」の付属物であるとされていたのだ。「新しい女」と社会主義に関しては、Ledger を参照されたい。また、1880 年代初頭から 1890 年頃にかけての女性とサイクリングについては、Woodforde 123-25 を、1890 年代終盤の娯楽としてのサイクリングについては、Thompson 217 を、それぞれ参照されたい。
- (13) しかしながら、ピーターが、クラリッサに、「母性的」という表現を与えたこともあったのである。「娘時代」のクラリッサが、出会ったばかりのリチャードと語り合う様子を見て、ピーターは、彼女の様子に「なにか母性的なものの、優しいもの (53)」を感じたというものである。が、実際に母となったクラリッサを、ピーターは、「母性的ではない」と断じている。つまり、「過去」においてピーターがクラリッサに感じた「母性」とは、「母としての性質」というより、「優しさ」に対する比喩表現であったと考えられる。その意味で、本論では、クラリッサを「母性的」ではない女性として扱いたい。
- (14) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 31.
- (15) ダーウィン主義者たちが説く生物学的性差決定論のいかかわしさを、ウルフ

は『三ギニー』の随所において攻撃している。

- (16) この問題については、拙論「エリザベス・ダロウェイの『手袋』—ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』論」で述べた。
- (17) 「家庭の天使」とは、ヴィクトリア朝以来広く支持されてきた既婚女性の理想像。この言葉は、コヴェントリー・パトモア (Coventry Patmore, 1823-96) の詩のタイトルに由来している。エッセイ「女性にとっての職業」で、ウルフは、「家庭の天使」を、「とても同情深く」、「とても魅力的」、「自己中心的なところは全くない」ことに加えて、「家庭生活を営む上での難しいわざに熟達し」、「日々自己犠牲をいとわない」と描写している (102)。
- (18) 物語上の「現在」から約30年前、クラリッサは、反体制の思想を抱くピーターやサリーの影響で、伝統的な価値意識には反発を感じていたが、ピーターは、彼女が生まれ育った世界の価値観からは逃れられず、いずれは「完璧な女主人^{ホステス}」になるであろうと言い、彼女はそのことにショックを受け、寝室で泣いた (5)。ところが、物語上の「現在」における彼女は、「家庭の天使」に通じるような「完璧な女主人^{ホステス}」であろうとしている。
- (19) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis* 43.
- (20) 詳細は拙論「エリザベス・ダロウェイの『手袋』—ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』論」を参照されたい。
- (21) このアナロジーによって、ウルフは植民地が受けた圧政に共感したと、キャシー・J・フィリップスはみている (97)。
- (22) 女性たち自身も、帝国主義と戦争に肩入れしていたという事実にも、ウルフが目を向けていたということを、フィリップスは指摘している (244-47)。
- (23) フィリップスの議論との関連でいえば、ピーターは彼女を、未婚の若い女性とみている (46)。
- (24) ボールドウィンは保護関税案も提出している。『ダロウェイ夫人』との対応を見ると、リチャードは「公共精神に富み、大英帝国、関税法案など、支配者階級に精神が多分にある (67)」とされており、保守党議員である彼に、ボールドウィンの政策が投影されているのを見とめることができる。エリザベスがミス・キルマンに代わる規範として見出したのが、父リチャードであり、彼女は「必要ならば国会議員にだってなりたい (120)」と考えている。
- (25) クラリッサのパーティでも、インドの独立運動は話題にのぼっている。『ダロウェイ夫人』に見られるインド問題については、Zwerdling 146を参照されたい。
- (26) 彼女の眼が「中国人のような、東洋的な」眼であることは、別の箇所でも繰り返されている (119)。

引用文献

- Abel, Elizabeth. *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis*. Chicago: U of Chicago P, 1989.
- . “Narrative Structure(s) and Female Development: The Case of *Mrs. Dalloway*.” Bloom, 103-25.

- Bloom, Harold, ed. *Modern Critical Interpretations: Virginia Woolf's Mrs. Dalloway*. New York: Chelsea House, 1988.
- Bowlby, Rachel. "Thinking Forward Through Mrs Dalloway's Daughter." *Feminist Destinations and Further Essays on Virginia Woolf*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1997. 69-84.
- Grayzel, Susan R. "'The Mothers of Our Soldiers' Children'; Motherhood, Immorality, and the War Baby Scandal, 1914-1918." *Maternal Instincts: Visions of Motherhood and Sexuality in Britain, 1875-1925*. Ed. Claudia Nelson and Holmes, Houndmills: Macmillan; New York: St. Martin's, 1997. 122-40.
- Ledger, Sally. "The New Woman and the Crisis of Victorianism." *Cultural Politics at the Fin de Siècle*. Ed. Sally Ledger and Scott McCracken. Cambridge: Cambridge UP, 1995. 22-44.
- Levenback, Karen L. *Virginia Woolf and the Great War*. Syracuse: Syracuse UP, 1999.
- Peach, Linden. *Critical Issues: Virginia Woolf*. London: Macmillan, 2000.
- Phillips, Kathy J. *Virginia Woolf against Empire*. Knoxville: U of Tennessee P, 1994.
- 榊原理枝子「エリザベス・ダロウェイの手袋—ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』論」早稲田大学英米文学研究会『ほらいずん』31号, 1999年, 27-47.
- 『『ダロウェイ夫人』における帝国主義のイデオロギー』『英米文学の原風景—起点に立つ作家たち—』新生言語文化研究会編, 音羽書房鶴見書店, 1999年, 99-126.
- Thompson, Grace. "Sport and Amusement and Sports Clothes." *Modes and Manners of the Nineteenth Century*. Fischel, Oskar, Max von Boehn, and Grace Thompson (two additional chapters) Trans. Grace Thompson. Vol. 4. 1879-1914. London: J. M. Dent, 1927. 200-26
- Wang, Ban. "T on the Run: Crises of Identity in *Mrs. Dalloway*." *Modern Fiction Studies*. Spring 1992: 177-91.
- Woodforde, John. *The Story of the Bicycle*. 1970. London: Routledge & Kegan Paul. 1980.
- Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. Ed. G. Patton Wright. London: Hogarth, 1990.
- . "Professions for Women." *The Crowded Dance of Modern Life: Selected Essays*. Ed. Rachel Bowlby. Harmondsworth: Penguin, 1993. 101-06.
- . *A Room of One's Own: Three Guineas*. Ed. Michèle Barrett. Harmondsworth: Penguin, 1993.
- . *To the Lighthouse*. Ed. Susan Dick. Oxford: Blackwell: 1992.
- Zwerdling, Alex. "Mrs. Dalloway and the Social System." Bloom, 145-64.